

第 4 章 目指せ,潜在意識による共生(鹿編)

橋爪 秀一

Idea-Creating Lab (神奈川県横浜市) 所長

hashizume.shu@nifty.com

要旨：古くから,日本人は鹿に対して可愛らしい,高貴である等の好印象を持っており,神使或は神獣として崇めてきた.しかし,現在,毎年約 60 万頭の鹿が害獣として駆除されており,駆除された鹿の大部分は,ゴミとして廃棄されているのが現状である.我々は鹿との共生を目指すためにも,駆除された鹿を有効資源として利用すべきと考えており,鹿肉,鹿皮や鹿茸の天然資源としての価値を模索している.

今回は,ニュージーランド,台湾,モンゴル,スコットランド及びドイツにおける鹿との付き合い方と鹿の資源としての利用法について報告し,鹿との共生方法について考察したい.更に,我々は,自然,動物,植物,他国,他人など様々な対象との平和的な共生が求められるが,それらとの共生に生かすことも模索していきたい.

キーワード：鹿,共生,獣害,潜在意識,天然資源

1. はじめに

農水省によると,2012 年度の野生鳥獣による農作物被害額は約 230 億円で,4 年連続で 200 億円を上回った.また,その被害の 7 割は鹿,イノシシ,サルであった.2016 年度になると野生鳥獣による農作物被害は,約 172 億円で前年度に比べ 5 億円減少(対前年 3%減)となり,減少傾向にある.主要な獣種別の被害金額については,鹿が約 56 億円で前年度に比べ約 3 億円減少(対前年 5%減),イノシシが約 51 億円で前年度に比べ約 6 千万円減少



図 1. スコットランドの白いアカジカ

(対前年 1%減),サルが約 10 億円で前年度に比べ約 6 千万円減少(対前年 5%減)となった.被害状況は減少する傾向にあるが,依然として鹿などによる被害は大きい.その為,現在,毎年約 60 万頭の鹿が害獣として駆除されており,駆除された鹿の大部分は,ゴミとして廃棄されている.我々は,駆除された鹿を有効資源として利用すべきと考えており,鹿肉,鹿皮や鹿茸の天然資源としての価値の向上を模索している.

ところで,日本人は古くから鹿に対して可愛らしい,高貴である等の好印象を持っており,神使或は神獣として崇めてきた歴史がある.図 1 は,スコットランドの John Fletcher 博士(前欧州養鹿協会会長)の牧場の白いアカジカであるが,気品ある姿は神の使いを彷彿とさせる.このように長い付き合いの鹿であることから,全日本鹿協会は,鹿の保護管理および資源としての持続的活用を図ることにより,鹿と人間との共生を目指している.また,鹿の管理意欲を煽るた

めにも、鹿に対する様々な資源的価値を高めていきたいと考えている。鹿資源としては、日本に於いては鹿皮、鹿肉及び鹿茸(図2)が主な活用部位であるが、海外での活用状況を視察した。



図2. 鹿茸(ロクジョウ) スライス

2. 鹿の海外視察

海外での鹿との共生施策を実際に現地へ赴き、視察した。興味深いことに、国により、考え方が大きく異なり、施策も国により独自性が高いものであった。

2.1 中国、ニュージーランド、台湾、モンゴル、スコットランド及びドイツ

中国では、鹿茸のみのビジネスであるが、毎年800トンの鹿茸を生産しており、儲けが大きいことから、フェラーリなどの高級車を買えるほど、裕福であるとのことであった。2019年末には、中国の実業家が日本を訪れ、奈良公園での鹿の取り扱い方を学びに来ている。既に、広大な土地も中国北部に用意できており、近々、鹿公園を作り、人を呼び込み、楽しんで貰うテーマパークを創りたいとのことであった。

ニュージーランドでは、豊かな国であることを様々な機会に実感した。動物園も充実しており、雄々しく美しいゴリラは、素晴らしかった。1.8メートルの木の柵で囲った中で鹿を飼育しており、鹿肉はスーパーで幅広く販売していた。鹿茸も韓国、中国へ輸出し、更にはハンティングビジネスなど多方面の事業に活用していた。囲いから逃げ出した野生の鹿は、ヘリコプターから撃ち殺すなどの過激な方法で、野生鹿の頭数を極力抑え、鹿の頭数を管理していた。過激な方法ではあるが、世界で範とするに足る一つの方法であると考えた。牧場経営者が、鹿にとって快適な牧場であれば1.8メートルの柵であっても、逃げ出すことはないという言葉は、今でも印象深く心に残っている。この快適さを、鹿とのwin-winの関係構築に活用することを模索したいと考えている。

台湾では、鹿肉を食べる習慣はないことから、鹿茸のみのビジネスである。630カ所の牧場で約2万頭を飼育しているが、野生の鹿も少なくないとのことであった。鹿茸ビジネスは、消費者に鹿茸を直売するシステムを採っており、収益率は40~50%であり、1kg当たり12-15万円で、60頭以上の雄鹿飼育で鹿茸を生産すれば儲かるとのことであった。

モンゴルでは、以前は首都ウランバートルの町中でも鹿を見かけたが、今ではホスタイ国立公園でのみで認められるくらいに減少している。同公園では、狼、鷲も生息していることから、鹿が襲われ、鹿の数が増えないことが悩みとのことであった。

イギリスでは、鹿肉は貴族の食べ物で庶民は食べる習慣がなかったが、最近はクリスマスなどで庶民も食べるようになってきている。スコットランドで鹿が飼われているが、野生の鹿も多く、日本と同様に、鹿による被害も大きいようだ。主なビジネスとしては、ブリーディング(繁殖)、ハンティングである。しかし、動物愛護の観点から、鹿茸ビジネスは禁止されている。日本人であれば、動物愛護の最重要課題はハンティング禁止と思うのであるが、鹿茸採取禁止とは、違和感を覚えつつも、考え方の多様性を実感した。また、鹿は牛よりも飼育に手間が掛からず、飼育が容易であることから、鹿牧場の数が増えているとのことであった。

ドイツは、イギリスと同様のビジネスを行っていた。特に、ブリーディングに力を入れており、1頭100万円程度で販売できるとのこと。

いずれの国でも感じたことであるが、鹿ビジネスは儲かる事業であることを実感した。また、鹿茸には、古くから記載があるように、「老いず」、「漢方の中の漢方」などの魅力的な効果があ

り、今後、詳しく調べる価値があるのではないかと考える。このように、鹿ビジネスは夢多き、将来有望な事業であると期待できる。

2.2 鹿茸の利用

鹿茸は、生薬であり、以下のようにして得られる。鹿茸にはシカ科の梅花鹿(バイカロク)または馬鹿(バロク)の雄の幼角が用いられる。梅花鹿は日本鹿のことであり、馬鹿はアカジカを意味する。幼角は毎年3~4月に角が脱けて新しい角が生え、5~6月頃に急激に成長する。生薬には、乾燥させたこの幼角を用いる。一般的な角は、**図1**のスコットランドのアカジカのような幾つかに枝分かれした美しい角を持っている。一方、台湾では、品種改良により、より重く、より商品価値が高い鹿茸を開発している。台湾では、毎年鹿茸の大きさを競う大会があり、2009年の大会で優勝した鹿茸は重さ15.11キログラムあり、100万ドルの価値があったとのこと。鹿茸の主な消費国は、中国、台湾、韓国、日本であり、日本は、主に中国などから2.8トンを輸入している(2014年度)。

2.3 鹿革の利用

鹿革は、牛革、豚革に比べて、繊維が細かいことから、柔らかく、強く、軽いとの優れた利点を有している。海外での鹿革の利用は少ないが、日本では、財布、バッグ、帽子などへの鹿革の利用が拡大している。今後の有効利用が大いに期待される。

2.4 鹿肉の利用

鹿肉は、高タンパク質(牛の3倍)、低脂肪(牛の1/10)、低コレステロール(牛の55%)、鉄分が多い、更には、魚が有するドコサヘキサエン酸(DHA)も含み、アラキドン酸など有益な成分を含むなど、優れた健康食材である。ニュージーランドでは、鹿肉が良く食べられていた。イギリス、ドイツなどのヨーロッパでは、鹿肉の消費が拡大している。一方、日本では、給食にも供されるようになり、利用が拡大している。

3. 考察

ニュージーランド以外では、鹿の管理が効果的に行われているとは言えず、鹿による被害が大きい。しかし、我々は撃ち殺すなどの過激な管理方法ではなく、神使である鹿に対して敬意を持った方法、例えば日本人らしく優しく、快適な牧場に誘い込む方法、潜在意識などに訴える方法などマイルドな共生方法を採用したいと考える。

例えば、

- 1 猪の垣(イのカキ)のような潜在意識に訴える警戒感を利用する方法
- 2 トウガラシ、ライオンの糞などの忌避物質を利用する方法
- 3 超音波などの音を利用する方法

などなど、試みられているが、十分な効果をあげているとは言えないのが現状である。

共生するためには、相手を良く知る、理解することが、不可欠である。相手の潜在意識を知ることにより、持続的な効率の高い方法を見出したいと考えている。また、ヒトの健康に寄与する「気」と言うエネルギーを鹿に用いた気功法利用による快適状況の創造も模索したい。そのため、様々な状況での相手を良く知ること、良く知るよう努力することが重要であると考えられる。

また、鹿との共生を実現するためには、資金が必要であり、そのためにも奪った命を無駄にしない多方面への有効利用が求められる。海外での鹿資源の利用状況などを参考にして、日本独自の共生方法を模索し、確立したいものである。

更には、鹿との共生方法を、自然、動物、植物、他国、他人など様々な対象との平和的な共生に応用することを模索していきたい。

橋爪 秀一 〒236-0005 横浜市金沢区並木 3-7-4-1303
Tel & Fax 045-783-2510 e-mail : hashizume.shu@nifty.com

Aiming at a symbiotic relationship with deer based on sub consciousness

Shuichi HASHIUME

Idea-Creating Lab (ICL), Yokohama-City, Japan

Director; hashizume.shu@nifty.com

Abstract: Since ancient times, the Japanese have always had a love for, and a noble impression of deer; they worshiped deer as both messengers and beasts of the gods. However, today, approximately 600,000 deer are killed each year as being animals that are destructive to agricultural and forestry activities. Furthermore, almost all the dead deer are disposed of as garbage and are not used as natural resources. To establish a symbiotic relationship with deer, I think that it is necessary to search for value in eating venison and in using both deerskin and deer velvet. In this report, I describe the present-day relationships between people and deer, focusing on the value of using deer as a natural resource in New Zealand, Taiwan, Mongolia, Scotland and Germany. Then, I discuss how to establish a symbiotic relationship between the Japanese and deer, in a way that sets a peaceful relationship with deer which can be applied to future symbiotic relationships of humans with other animals, plants and so on.

Keywords: deer, symbiosis, destructive animals, sub consciousness, natural resources